



日语学习系列

最新日语能力 全真模拟

さいしんにほんごのうりよくしけんもぎテスト

(上册) 读解篇1-2级

编著 王 欣
吴毓华
审校 松尾善弘



四川大学出版社



最新日语能力全真模拟

读解篇 1・2 级

王欣 吴毓华 编著
松尾善弘 审校

四川大学出版社

责任编辑:黄新路
责任校对:吴昀
封面设计:米茄设计工作室
责任印制:杨丽贤

图书在版编目(CIP)数据

最新日语能力全真模拟(读解篇) 王欣, 吴毓华编.

成都:四川大学出版社, 2007. 12

ISBN 978-7-5614-2843-6/H. 173

I. 日… II. ①王… ②吴… III. 日语-高等学校
- IV. H173

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2007)第 160139 号

书 名 最新日语能力全真模拟(读解篇)

编 著 王欣 吴毓华
出 版 四川大学出版社
地 址 成都市一环路南一段 24 号(610065)
发 行 四川大学出版社
印 刷 郫县犀浦印刷厂
成品尺寸 185mm×260mm
印 张 30.8
字 数 621.5 千字
版 次 2007 年 12 月第 1 版
印 次 2007 年 12 月第 1 次印刷
印 数 5000 册
定 价 42 元

◆读者邮购本书, 请与本社发行科
联系。电话: 85401669/85401670/
85400023 邮政编码: 610065
◆本社图书如有印装质量问题, 请
寄回出版社调换。

版权所有◆侵权必究

总序

我国 2001 年 7 月申奥成功,同年 12 月加入世贸组织,2002 年 12 月上海取得 2010 年世博会的主办权,接踵而来的喜讯使改革开放的中国迎来了经济腾飞的大好机遇。许多外国知名企业,特别是邻国日本的知名企业纷纷将高科技项目转移到我国大、中城市和沿海发达地区,市场对日语人才的需求急遽上升。日语水平资格认定书已成为日本企业验证日语人才质量的重要依据。另外,许多日本大学也要求留学生报考时必须达到一级合格水平。日语能力考试成了就业、留学的敲门砖。因此,国际日语水平测试得到了前所未有的广泛关注。

日本語能力测试(JPT)是日本国际交流基金及其财团法人日本国际教育交流协会组织于 1984 年开始实施的,专为母语为非日语的学习者举办的水平考试。每年 12 月的第一周的周日面向全世界不同国家不同地区的考生同日开考。考试的命题、阅卷工作均由日本国际教育交流协会负责并组织实施。在我国大陆地区该考试由中日双方组成的考试协力委员会负责,国家教育部考试中心组织实施。考试按照难易度分为 1、2、3、4 级。1 级为最高级别,相当于大学本科专业日语 3、4 年级的水平;4 级为初级入门考试,主要用于检验日语学习者初级阶段的学习效果。每个级别的考试均由“文字·词汇”、“听解”、“语法·读解”三个部分组成。各级考试的时间和分数值如下表所示。

	文字·词汇	听解	语法·读解	总计
1 级	45 分钟	45 分钟	90 分钟	180 分钟
2 级	40 分钟	40 分钟	80 分钟	160 分钟
3 级	35 分钟	35 分钟	70 分钟	140 分钟
4 级	25 分钟	25 分钟	50 分钟	100 分钟
分数值	100 分	100 分	200 分	400 分

自 2000 年起日语能力考试的题型有所改变。2002 年修改了出题基准,难度也有所增加。2003 年开始实行网上报名制。

为了满足广大考生的应试需求,我们编写了这套指导用书。全套书共分四册:

《最新日语能力考试全真模拟》(词汇篇 1·2 级)主编 沈滢 王欣

《最新日语能力考试全真模拟》(语法篇 1·2 级)主编 聂中华 曾文雅

《最新日语能力考试全真模拟》(读解篇 1·2 级) 主编 王欣 吴毓华

《最新日语能力考试全真模拟》(听解篇 1·2 级) 主编 吴玲 王银芳

本套书的最大特点: 整理归纳出题基准, 分级进行题型详析; 解剖历年测试重点, 悉心传授解题技巧; 模拟逼真题量充足, 应试对策简便实用; 考生只需严格按照本书安排循序渐进, 稳扎稳打, 就一定能够达到如期目的, 实现一举过关的愿望。

由于时间仓促, 全套书的体例不尽一致, 编写错误在所难免, 敬请各位同仁和读者批评指正。

编著者

2007 年 10 月于浙江工商大学

目 次

読解問題(1 級)

第 一 回	1
第 二 回	11
第 三 回	24
第 四 回	41
第 五 回	58
第 六 回	70
第 七 回	88
第 八 回	96
第 九 回	115
第 十 回	122
第十一回	130
第十二回	141
第十三回	148
第十四回	157

読解問題(2 級)

第 一 回	162
第 二 回	178
第 三 回	205
第 四 回	216

課外読物

報恩記	239
おおかみと七ひきのこどもやぎ	253

女百貨店.....	257
おじいさんのランプ.....	267
鴛鴦鏡.....	278
幼き日.....	288
類義語.....	297

読解問題(1 級)

第 一 回

(一)

連歌俳諧では、春の「花」、夏の「時鳥」、秋の「月」、冬の「雪」という四つの季題を、非常に大事なものに考えている。その中でも「花」と「月」の二つが、重いものであった。「花」と言っただけで、春の豊かな華麗さが、詩的イメージとして想い描かれたし、「月」と言っただけで、秋の清涼の気が、同じく詩的イメージとしてぱっと脳裏に広がってきたのである。(A)、この二つの季語は、日常用いられている言葉でありながらそれ自身で詩的昇華を遂げようとしている傾向にある。もちろんこういうことは、一般的にはありえないのであって、あらゆる言葉は、詩句のなかに一定の位置を得て、はじめて現実的な意味のほかに、詩的意味を担うのである。そのような作用が、「花」や「月」という言葉では、さらに強力に働くのだとみていい。単語であるとき、すでにそのような作用の中に置かれるという期待が存在するのだと、みていいだろう。

「花」に季題解説を、ただ「桜のことだ」と言ってしまうのは、その歴史的に担った言葉の意味を抹殺して、ただ空虚な約束だけを守っていることになる。それは季題解説として、落第だと言わなければならない。私は試みに、次のような解説を与えたが、それは以上述べたように、「花」という言葉に執着した昔の詩人たちの気持ちと、考慮に入れた結果である。

「花とはふつつ桜の花を言う。一般でも花見と言え、桜にきまっているが、俳諧では、とくに春の花の代表としての桜をさして言う。(B)、《花といふは桜の事ながら、すべて春の花を言ふ》と『白冊子』にもあるように、花は桜でありながら、春の花一般であるという重層的な規定がある。つまり桜以外の千草万木でもただ花と言っ場合は、賞翫の心が大きい。したがってこの季題は、詩的イメージとしては、桜でありながら桜という特殊な限定を越えたものである。晩春の季を持つと同時に、春の花として三春にわたっている。ふつつ花時は、四月上旬の短い期間である。」(新俳句歳時記)

これだけ「花」という言葉について説明を与えなければ、私には不完全と思われたのだ。

(注) 昇華＝一段と高められること。

抹殺＝消し去ること。

「白冊子」＝服部土芳の俳句評論集。

賞翫＝ほめ味わうこと。

三春＝初春・仲春・晩春

問一 () A にあてはまる言葉を次から一つ選び、記号で答えよ。

- 1 だが
- 2 または
- 3 なぜなら
- 4 だから

問二 () B にあてはまる言葉を次から一つ選び、記号で答えよ。

- 1 だが
- 2 または
- 3 なぜなら
- 4 ところで

問三 筆者の考えとして、適当でないものはどれか。一つ選び、記号で答えよ。

- 1 「花」と言っただけで、春の豊かな華麗さが、詩的イメージとして思い描かれるので、それは、春を代表する季題にふさわしい。
- 2 「花」と言えば、「桜のことだ」という約束を守るだけでは、昔の詩人たちの花に対する詩的イメージが、十分生かされない。
- 3 「花」とは、桜を代表として表すが、その他の千草万木の花をも含めて、春らしい詩的イメージを表す広い幅を持っている。
- 4 「花」と言えば、「白冊子」にもあるように、連歌俳諧では、花時が四月上旬の桜のことを、詩的イメージとして思い描く。

(二)

北海道の南西部にある断崖沿いの原野を、肩まである熊笹を木刀で切り倒しながら

ら道を作って歩いているとき、ひょいと熊に出くわしたことがあった。そこはある村と別の村との間にあるエアークケットのようになった人家のない地域で、北に向かって歩く勇の左耳に岸壁に打ち寄せる波音が届き、見渡す限りが熊笹の海だった。戦後一度だけ北大の山岳部の一行がその原野を横切ろうと試みたが、途中で道に迷って引き返してきたという。進んでいくうちにそれまであった獣道らしいものはなくなり、それでも勇は冷ややかな風と大きな空の下を比較的暢気に、鼻歌などを口ずさみながら歩いていた。

そんな勇の前に、だしぬけに黒い剛毛が出てきた。初めは岩かと思い、その次に熊の尻だと知ってあぜんとした。突然のことで、恐怖を感じる暇もなく、魂が抜けた。次の瞬間、熊は熊笹の中に姿を消した。やにわに勇は大声を放った。ヤーといった気もするし、ギャッといった気もする。熊が出るから気をつけろと、村の人にいわれてきたが、本当に出るとは思わず、無邪気な挑戦心も湧いて、() と思ったりしていた。

熊はまだ子供だったらしく、笹を食うのに夢中で勇の足音には気付かなかっただろう。それでも勇が二メートル後に立つと、さすがに感じるものがある、逃げ出したのだろう。再び歩き出しながら、勇は足が石のように固くなっているのを感じていた。そして、熊を見たときに勇を襲った、底のない虚脱感のようなものを思い出していた。孤独とか、人を頼れない孤立といったものを越えて、死を常識とした無防備な状態で、相手の軀全体を眺めていた。

問一 () にあてはまる言葉を次から選び、記号で答えよ。

- 1 出そうな所はさけて通ろう
- 2 出るはずはないだろう
- 3 出たら逃げてしまおう
- 4 出たらやっつけてやろう

問二 傍線部「死を常識とした無防備な状態」とあるが、これはどのような状態を表しているか。次から一つ選び、記号で答えよ。

- 1 死んでもあたりまえだと思われるような、そなえのない状態。
- 2 死んだりするはずがないと思って、そなえをしていない状態。
- 3 大胆に危険に立ち向かい、死ぬことなど全く恐れていない状態。

4 死ぬこともありうると思い、そなえに手ぬかりはないかと不安な状態。

(三)

{ある日、私（少年）は、家族ぐるみで東京から避暑に来ている少女の家に、父が釣ってきた魚をとどけ、代金をもらってくるように父に命じられた。}

「魚を持って来ました。」

私は縁先の物干しの棒のところに立ち止まって、よそ行きの言葉で言った。そこからは内部が覗かれなかったの、家の中に、誰が居るか全然判らなかった。私はただ家の内部へ向かって、声をかけたのであった。

何の返事もなかった。

「魚を持って来た！」こんどは、私は大きい声で叫んだ。

と、砧きぬ子の顔が縁側から覗いた。

「荒、お魚？」彼女は言うのと庭へ降りて来て、ザルの中を覗き込み、

「まだ生きているわ。」そう言ってから、

(A) と奥に叫んだ。

「なんていうお魚！」彼女は言った。

①私は口がきけなかった。彼女は私より少し背が高かったが、近くでみると、いつも私が思っていたよりずっと子供っぽかった。

私がザルを地面の上に置くと、彼女はそこに屈み込み、小さい棒切れを拾って、それで魚の肌をつついた。そんなことをしている彼女を、私は上から見下ろしていた。私はそれまでに、そんな華奢な白い手首を見たことはなかった。首も細い首の上にオカッパの髪がきちんとそろえて切られてあった。

間もなく、彼女の母親が、これも縁側から降りて来ると、

「ごくろうさんね。お幾ら。」と言った。私はこの魚の代金を受け取るのが、何か恥ずかしかった。

ひどく卑賤な行為のような気がした。

「いいです。」と私はいった。

「よくはないわ。お幾らですって。」

「父ちゃんが上げておいでってー。」

②私は憤ったように言った。すると、

「まあ、それは、お気の毒ね。よくお礼を言って頂戴ね。」

彼女の母は言った。私が彼女の母と話をしている間に、きぬ子は私のところから離れ、縁側から部屋の中に上がって行った。

私はそこを立ち去る時、初めて離れの家の中を覗いた。きぬ子が南向きの縁側に面した部屋の隅、小さい机に向かっていて、その背後姿だけが、私の眼に入った。何か雑誌でも読んでいる様子だった。

(井上靖「晩夏」より)

問一 (A) に当てはまる会話文は、次のどれか、記号で答えよ。

- 1 「母さん、お魚ですって！」
- 2 「何ていうお魚。」
- 3 「あら、お魚？」
- 4 「あら、なに？」

問二 傍線①「私は口がきけなかった」ときの気持ちを説明した次の文の()にあとから適当なものを選び、記号で答えよ。

私は、きぬ子が突然目の前にあらわれたことと、きぬ子の矢つぎばやの会話に気おくれし、()を覚えた。

- 1 恥ずかしさ
- 2 不安
- 3 後悔
- 4 気おくれ

問三 傍線②「私は憤ったように言った」とあるが、それはなぜか。その理由として適当なものを次から一つ選び、記号で答えよ。

- 1 きぬ子の母のしつこい催促に対する不満やいらだちから。
- 2 きぬ子の母にうそをついたことへの腹立たしさや情けなさから。
- 3 きぬ子を強く意識する気持ちと少年らしい潔癖さから。
- 4 きぬ子の勝手なふるまいに対する意外さと少年特有の正義感から。

問四 この文章では私のきぬ子に対するどのような心情が描かれているか。適当なものを一つ選び、記号で答えよ。

- 1 彼女と親しく言葉を交わすこともできず悲しく感じている。
- 2 彼女の気づかいに心を動かされいっそう親しみを感じている。
- 3 彼女が私の気持ちを受け入れてくれずあせりを感じている。
- 4 彼女を目の前にして新鮮な驚きやあこがれを感じている。

(四)

ある寒い日の午後、わたしは食後の茶でくつろいでいた。表に人のけはいがしたので、ふり向いてみた。思わずあっと声が出なかった。急いで立ち上がって迎えた。

来た客はルントーである。一目でルントーとわかったものの、そのルントーは、わたしの記憶にあるルントーとは似もつかなかった。背丈は倍ほどになり、昔のつやのいい丸顔は、今では黄ばんだ色に変わり、しわも深いしわが畳まれていた。目も、彼の父親がそうであったように、周りが赤くはれている。わたしは知っている。海辺で耕作する者は、一日じゅう潮風に吹かれるせいで、よくこうなる。頭には古ぼけた毛織りの帽子、身には薄手の綿入れ一枚、全身ぶるぶる震えている。紙包みと長いきせるを手に提げている。その手も、わたしの記憶にある血色のいい、丸々した手ではなく、太い、節くれ立った、しかもひび割れた、松の幹のような手である。

①わたしは感激で胸がいっぱいになり、しかしどう口をきいたものやら思案がつかぬままに、ひと言、

「ああ、ルンちゃん—よく来たね……。」

続いて言いたいことが、後から後から、じゅずつなぎになって出なかった。チアオチー、跳ね魚、貝がら、チャー……だがそれらは、何かでせきとめられたように、頭の中を駆け巡るだけで、口からは出なかった。

彼は突ったままだった。②喜びと寂しさの色が顔に現れた。くちびるが動いたが、声にはならなかった。最後に、うやうやしい態度に変わって、はっきりこう言った。

「(A) ……」

わたしは身震いしたらしかった。悲しむべき厚い壁が、二人の間を隔ててしまったのを感じた。わたしは口がきけなかった。

彼は、後を向いて、「シュイション (水生)、だんな様におじぎしな。」と言って、彼の背に隠れていた子供を前へ出した。これぞまさしく三十年前のルントーであつ

た。いくらかやせて、顔色が悪く、銀の首輪もしていない違いはあるけれども。「これが五番目の子でございます。世間へ出さぬものですから、おどおどしておりますて……。」

母とホンルが二階から降りて来た。話し声を聞きつけたのだろう。

「ご隠居様、お手紙は早くに頂きました。全く、うれしくてたまりませんでした、だんな様がお帰りになると聞きまして……。」と、ルントーは言った。

「まあ、なんだってそんな、他人行儀にするんだね。おまえたち、昔は兄弟の仲間じゃないか。昔のように、シュンちゃん、でいいんだよ。」と、母はうれしそうに言った。

「めっそうな。ご隠居様、なんとも……とんでもないことでございます。あのころは子供で、なんのわきまえもなく……。」そしてまたもシュイションを前に出しておじぎさせようとしたが、子供ははにかんで、父親の背にしがみついたままだった。

(注) チアオチー＝鳥の一種

チャー＝穴ぐまに似た動物

問一 傍線①「わたしは感激で胸がいっぱおになり」は、どういうことに感激しているのか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えよ。

- 1 ルントーが黄ばんだ深いしわの畳まれている顔でありながら、たくましく生きていることに感激した。
- 2 ルントーが貧しい身でありながら、わざわざ訪ねて来てくれて、久しぶりに再会できて感激した。
- 3 ルントーが昔のつやのいい丸顔とはうって変わって、深いしわだらけの顔になっていることに感激した。
- 4 ルントーが貧しくみすばらしい身でありながら、子宝だけには恵まれていることを知り感激した。

問二 傍線2「喜びと寂しさの色が顔に現れた」から、ルントーのどのような気持ちがわかるか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えよ。

- 1 わたしに会った喜びと子連れ自分を恥ずかしく思っている。
- 2 わたしに会った喜びと家族との別れをつらく思っている。

- 3 わたしに会った喜び自分のみじめさをわびしく思っている。
- 4 わたしに会った喜び幼少のころをなつかしく思っている。

問三 この文章では何が中心に描かれているか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えよ。

- 1 三十年の歳月は人の心をも遠く隔ててしまったこと。
- 2 三十年も経つと子は親に似るものであるということ。
- 3 三十年経っても友達がちっとも進歩していないこと。
- 4 三十経っても故郷は昔のまま変わっていないこと。

(五)

ここ十年ほど、毎年のように一か月ないし二か月を外国旅行にさいている。旅へ出る前と旅から帰ったあとはそれぞれ一か月ほど忙しく過ごさねばならぬが、そのかわり旅へ出ている間は全く仕事からも家庭の雑事からも解放されている。羽田を飛び立つ瞬間から私は小説家でも家庭人でもなくなる。旅行者である。旅行者としての私の周囲を、それまでとは全く異なった時間が流れだす。

旅に出て、人は初めて眺め、感じ、考える立場に立つことができる。私なども東京の生活の中にあるかぎり、容易なことでは眺め、感じ、考える場に立つことはできない。作家である以上、そうしたことが本来の仕事であるはずであるが、なかなか①それができない。羽田から飛行機に乗った瞬間から、東京駅あるいは上野駅から列車に乗った瞬間から、不思議なことだが、眺めたり、感じたり、考えたり始める。(1)の立場に自分を置くことによって、決まりきった生活から自分を解放することによって、五感②それ本来の機能を取り戻してくるかのようである。旅というものはいいものである。

旅の贈りものの中で最大なものは旅情である。未知の風景の中を横切ったり、知らないものを見たりすることだけが旅の目的だったら、旅というものはたいしたものではない。金と時間を費やして、わざわざ旅に出る必要はないだろう。旅をする以上旅情を十分味わうことのできる旅でなければなるまい。旅情とはその字の如く(2)である。しみじみと旅に出たという思いを持たぬような旅ならたいした旅とは言えないだろう。

が、この旅情なるものがなかなか厄介である。遠くところに旅したからといって、

旅情を味わえるわけのものでもない。早い話が、北極に旅行しようと、太平洋上の孤島に旅行しようと、旅情を味わえると③請け合うことはできない。いくら人跡未踏の地に行っても、人情風俗の全く異なるところへ行っても、珍しいところに来たといった驚きこそあれ、それをそのまま旅情とは言えないだろうと思う。

それなら一体旅情とは何だろう。私は旅情というものは、私たちが旅において、異なった土地の風物に接して、人生を感じ、人生を考えさせられた時初めて生じてくる旅独特の思いであると思う。(3) 遠いところへ来たというだけでは旅情は生まれない。遥けくも来つるものかなという旅の思いは、遠隔感だけからは生まれてこない。どこかで人生的な思いと結びついていなければならない。

ただ厄介なことは、旅情は求めて得られるものではないということである。こちらで掴みとるものでなく、向こうからやってくるものである。人が自分で作りだすものではなく、自然に生まれてくるものである。だからこそ旅は面白いのである。

(井上靖「私の中の風景」より)

問一 (1) に最もよく当てはまる言葉を、次の中から一つ選び、その記号を書け。

- 1 旅行者
- 2 旅行
- 3 旅情
- 4 旅

問二 (2) に最もよく当てはまる言葉を、次の中から一つ選び、その記号を書け。

- 1 旅の思い
- 2 旅行
- 3 旅情
- 4 旅

問三 (3) に最もよく当てはまるものを次の中から一つ選び、その記号を書け。

- 1 やや
- 2 ただ
- 3 さて
- 4 では

問四 傍線①の「それ」の指す内容は何か。最も適切なものを次の中から一つ選び、その記号を書け。

- 1 眺め、感じ、考える立場に立つこと
- 2 想像すること
- 3 したいこと
- 4 想像がつかないこと

問五 傍線②の「それ」の指す内容は何か。最も適切なものを次の中から一つ選び、その記号を書け。

- 1 五感
- 2 眺め
- 3 感じ
- 4 考え

問六 傍線③「請け合う」の意味として最も適切なものを次の中から一つ選び、その記号を書け。

- 1 確約する
- 2 納得する
- 3 宣言する
- 4 信用する

問七 この文章は何について述べられているか。最も適切なものを次の中から一つ選び、その記号を書け。

- 1 旅情の厄介さ
- 2 旅の心得
- 3 旅の面白さ
- 4 旅と人生